ボルネオ島におけるオランウータン保護とその周辺
—リハビリセンターから見えてきたもの—

村松　こはぎ

1970年代後半以降、地球的規模で熱帯雨林の減少を問題視する動きが活発化した。しかしそれらの多くが今日の環境問題の原因を経済開発の歪みに起因するものとして「開発か保護か」もしくは「人か自然か」といった二項対立を思わせるものであった。しかし今日の熱帯雨林地域の状況を考えれば明らかなように熱帯雨林問題はそうした二項対立で解決できるものではなかった。それは二項対立や地球規模で熱帯雨林問題を考えることで逆にその地に暮らす人びとへの視点が消されてしまったためである。そうしたことから今、熱帯雨林問題の研究は「地球規模」から「地域」へ、「人か自然か」から「人と自然へ」という視点へ移行しつつある。

本稿の目的は「地域」の「人と自然」ということを念頭に置き、その上で今日のボルネオ島における動物保護の周辺にある問題点をサバ州のオランウータンの保護施設を通じ、提示することにある。

ボルネオ島はマレーシア、インドネシア、ブルネイの3カ国により構成されており、赤道にまたがり北緯6度から南緯4度、東経109度から119度に広がる、世界で第3番目に大きい島である。1年を通じて高温多湿の気候をもち、平均最高気温は30度前後、年間平均降雨量は2000ミリから4000ミリ。アフリカや中南米と並んで熱帯雨林を有する地域である。ボルネオ島はとりわけ多島海に位置していること、島自体が大きいこと、すぐ周辺にインドや中国といった巨大文明圏を抱えているという独自の特徴から、種の多様性が高く、巨大な樹木が育ち、森の中に多くの人びとが住み、古くから森に依存する生活を送ってきた。

そうしたボルネオ島は豊かな天然産物を有するが故に1960年以降、主に木材輸出のための森林伐採、オイルパーム農園の拡大といった急速な森林開発の波にのみこまれていった。その影響は、オランウータンを始めとする動植物の減少のみでなく、ヒトへも及んでいる。サバ州の場合、オイルパーム農園の拡大とチェーンソーが導入される1960年以前は強い自然の中で伝統的な焼畑耕作を生業とし、自然と人間は調和のとれた関係を結んでいた。しかしながら、いくら強い自然であっても森林開発のために導入されたチェーンソーやオイルパーム農園に使用される大量の農薬には勝てなかった。森林が奪われ、まず打撃を受けた人は先住民であった。稲作耕作が続けられなくなれば食糧生産が低下する。人びとは仕方なく街に出るが、必ずしも職があるわけではない。また、土地に商業的な価値が生じることにより人びとの間には土地への権利や木材への権利意識が強まった。その他、森林開発時代、木材バブルを経験した住民たちは生活にテレビや自動車、チェーンソーといったものを導入することで、急激に商品経済に巻きこまれたが、木材バブルがはじけた今、人びとはそうした現金支出をまかなうために街へ出稼ぎに行かざるを得なくなってしまった。

では生物種は森林開発によってどの様な影響を受けたのか、オランウータンを中心に見ていきたい。マレー・インドネシア語で“森の人”を意味するオランウータンはショウジョウ科に属するアジア唯一の大型類人猿である。成獣のオスの場合、身長は1.4メートル、体重は50－100キログラムになる。メスの繁殖可能期間は約20年、妊娠期間は約275日。12歳になるまで子どもを産まず、次の出産までに4－6年の歳月を要するため約35年という平均寿命の中で出産する子どもの数は少ない。そのために絶滅の危機が増大している種でもある。またオランウータンはほぼ完全な樹上生活類人猿であり、滅多なことがない限り地上に降りることはない。それは地上に潜む有害動植物やバクテリアから身を守ることに役立っていると同時にオランウータンにとって森林がいかに重要なものであるかを示している。

オランウータンの生息域は地球上に2ヶ所。ボルネオ島およびスマトラ島北西部の一部のみである。推定生息頭数は1987年時で約39,000－81,000

頭、1997年で10,200－15,500頭と考えられている。加えてボルネオ島では1997年98年に大森林火災が起きており、現在の生息頭数はこの推定値より少ないと思われる。こうしたオランウータンの減少原因は主に3つ、食肉目的の密猟、ペットとしての飼育目的の密猟と密輸、森林破壊による生息域の減少に伴う減少である。これら3つのうちもっとも大きな減少原因は森林破壊に起因するものである。

オランウータンを始めとし、大規模森林開発の影響により絶滅の危機に瀕する動植物たちは今日、様々な国際条約にて保護されている。オランウータンの場合、ワシントン条約では付属書Ⅰ（絶滅の恐れのある種）に記載され、国際自然保護連合により作成されているレッド・リストでは2000年現在、絶滅危惧種（EN）に登録され国際的に保護されている。また国内法では、サバ州の場合、1963年に動物種保全条例が制定され、オランウータンはサバ野生生物局の下、保護動物として保護されている。この他、傷ついたり、生息地を失ったオランウータンを保護し、再び野生に戻すためのリハビリを施すための施設がボルネオ島には現在4カ所存在する。

サバ州の州都コタキナバルからバスで約6時間、人口約22万人のスールー海に面した東海岸の港街サンダカンにそのうちの一つがある。セピロク・オランウータンリハビリセンターである。同センターは「ペットとして飼育されていたり、森林伐採の際に母親や生息地を失ったオランウータンを保護し、再び森での生活に適応させるためのリハビリを施す」ことを目的とし1964年に設立された。設立当初はサバ州森林局野生生物課によって運営されていたが、1988年の観光環境開発省野生生物局の設立に伴い、以後全ての管理・運営は同局に任されている。センターは現在、設立当初の活動方針に加えて「環境教育」「調査研究」「他の絶滅危機種の保護」を主な活動方針としている。職員は2000年9月現在、4部門計24人から構成されている。

オランウータンのリハビリプログラムはセンターに受け入れられた後、結核、マラリア等の検疫を動物病院で受けることから始まる。その後、保育園に入れられ、そこで森の中での食べ物の探し方、巣の作り方、木の登り方といった自然界での生活に必要な基本的な技術を学ぶ。次に森での生活を通しながら自活する術を学ぶ。1日2回の食事が人間から与えられる。観光客の目に触れるのはこの段階のオランウータンである。この段階を卒業すると人目のつかない森の奥へと移され、食事も与えられなくなる。そしてやがて自然にセピロクの森へと帰ってゆくことになる。

センター開設以後150頭から200頭のオランウータンが以上のようなリハビリプログラムを終え、森へ帰ったという。1頭のオランウータンが卒業するまでに要する時間は平均して8年から16年。しかし約10パーセントのオランウータンは再びセンターに戻ってくるという。現在同センターでリハビリ中のオランウータンは42頭である。

オランウータン1頭に必要なリハビリ費用は平均25,000リンギット（約75万円）、現在42頭がリハビリ中であることからおよそ105万リンギット（約3,150万円）が必要となる。センターはサバ州野生生物局の管理下にあることから経済基盤は同局にある。特定の機関からの援助はなく寄付のみであるというが、政府のつながり上、実際には同センターはコタキナバル近郊の5つ星ホテルにリハビリ中のオランウータンを貸し出ししており、多額の援助があるものと思われる。その他、観光会社やセンターを撮影にくるテレビ会社、写真家、観光客からの入場料が収入源となっている。

同センターは環境教育と経済的な問題からリハビリプログラムの一般公開をおこなっている。1999年の1年間に同センターを訪れた観光客は7万759人であった。これは同センターが東南アジア最高峰のキナバル山に次ぐ観光地であることを示している。リハビリ中のオランウータンにとって最も重要なことは人から離れていくことであると言う。そうしたオランウータンにとって多数の観光客との触れ合いは良いわけがない。センター職員も同センターにおける保護活動の問題点として、まず第一に観光客が多すぎることを挙げている。実際、ボルネオ島内にある他のリハビリ施設では観光客がもたらした病気により多数のオランウータンが病死し、施設を別の場所に移さざるを得なくなった例がある。しかし、観光客が落とす経済的利益を目当てにした政府による意向から、今のところこうした状況に改善の見込みはない。

環境教育を名目に様々なところに門戸を開いているセンターであるが、当のオランウータンはセンターを通じどのような人との関わりを持ってい

るのであろうか。

コタキナバル近郊の５つ星高級ホテルには４頭のオランウータンがいる。名目上はリハビリを行っているとのことであるが、現実には宿泊客への見せ物である。この４頭のオランウータンは経済的利益を求める政府の意向によりセピロクのリハビリセンターからホテルへ貸し出しされているものである。センター職員はこのプログラムに対して否定的である。しかしながら皮肉にもオランウータンと企業はセンターを通じて、経済的利益という接点で結びついている。

サバ州では今日、かつての主要産業であった木材等の第一次産品が森林資源の枯渇により低迷していることから、政府は観光を次なる主要産業へと仕立て上げようとしている。1990年のマレーシア観光年ではオランウータンは国民的マスコットとなった。この地にしか生息しないオランウータンは政府にとっては恰好の観光資源である。とりわけリハビリ施設を観光舞台とすればオランウータンの“資源”性が薄れ、逆に“保護”性が前面に出るので都合が良いに違いない。オランウータンと政府はセンターを通じて観光資源という接点でつながっていると言える。

一方、観光客はセンターを通じてオランウータンとどの様な関わりを持つのであろうか。1999年にセンターを訪れた外国人観光客は40,265人であった。国別でみると圧倒的に英国からの観光客が多い。日本は２番目に多い。こうした外国人観光客はセンターが発行するセンターに関するパンフレットを良く読むし、オランウータンの現状を知って貰うためのビデオも大半の人が見る。センター訪問後の感想を尋ねると、オランウータンや自然を大切にしなければならない、森林開発をやめて貰いたいといったセンターが望む答えが戻り、動物保護の重要性を理解しているようだ。つまりオランウータンと外国人観光客は欧米からやってきた保護の思想という接点で結びついている。しかし、本当にオランウータンを始めとした動植物を守るだけで良いのであろうか。あるいは、オイルパーム農園や木材会社で働く住民を非難し、動植物を守るだけで動植物を守ることはできるのであろうか。

最後に、住民とオランウータンの関わりを考えてみたい。同センターには毎日、外国人観光客以上に地元の住民がやってくる。しかしながら、何故ここにオランウータンがいるのか知らない人もいれば、そこが保護施設であることを知らぬ人も多い。こうした状況をセンター職員は保護への関心がないと捉えているが、私は保護への関心が無いのではなく、関心の的が異なると解釈したい。サバでの調査旅行が２週間、３週間になるにつれ、住民が動物に対して抱く感情と、時に住民の生業を切り捨てててでも動物を守ることが重要とする動物保護の思想を住民に強制しようとする私たちが動物に対し抱く感情との間にはズレがあるように感じ始めた。そのズレが何に起因するものであるかはさらなる住民との対話が必要であることから、それは今後の課題としたい。

私がセンターに滞在した１週間はあまりにも短いものであったが、住民と当のオランウータンのみがセンターの中でどこか取り残された、あるいは私たちのみが浮いていた、感じがしてならなかったことを最後に記しておきたい。開発の波によって途切れたかのように見えた住民とオランウータンの関係は、一方は観光資源として保護され、一方は保護のない貧困の中で生きるという別の道にいながらも、開発による被害者という接点でつながっているのではないだろうか。

以上の本論から、三つの問題点・ジレンマを提示する。

第一に、減少し続けるオランウータンを救うためのセンターの活動は、施設で働く職員の善意や使命感によるもので美しいものである。しかし、センターを管理・運営する政府の一部の利潤追求への欲望と進み続けようとする経済の動きからオランウータンの生息域である森林は今もなお伐採し続けるばかりで、オランウータンの減少に対する歯止めはかかっていない。

第二に、センター設立当初の善意に満ちた保護活動も政治や経済のといった周囲の波に洗われて、リハビリ中のオランウータンは人と接するべきでないと知りながらも経済的利益に奉仕せざるを得ないセンター職員の葛藤がある。

第三に、オランウータンをはじめとした動物と人間の関係である。1960年以降の大規模開発によって被害を受けたのはオランウータンをはじめとする動植物のみではなく、先住民や開発以前からその地に暮らしていた人びとでもある。しかし、保護へのまなざしはいつも動植物、中でも観光資源に利用することのできるオランウータンにあっ

て、住民へは向けられてこなかった。これからは同じように開発の犠牲となった住民たちへの視点も必要なのではないだろうか。また、動物と人間の関係を地域の住民の視点から捉え直すことも不可欠であると言える。

これらの問題、ジレンマはオランウータン及びマレーシア、インドネシアに限るものではなく、人間の経済活動と自然環境の調和という今世紀の人間が当面する最重要な、問題と関わっており、簡単に解答のでる問題ではない。本稿では問題の提示のみに終わっているが、問題の根本的解決は将来に残されている。